

教育実践

進路指導の改善・充実

——キャリア教育の必要性——

(前)埼玉県立川口工業高等学校 電気科

富沢 健一

(現 久喜工業高等学校電気科)

本校は、日本の「ものづくり」を支える製造業者が4500社以上ある、東京に隣接する川口市に昭和12年に創立され、埼玉県南部では普通高校を含め4番目に歴史のある高校である。また、工業高校の中では、県内で3番目に設立され、今年創立70周年を迎える。卒業生は、産業界をはじめ各界で活躍している。現在、機械・電気・情報通信の3学科からなり、各学科とも幅広い基礎学力と専門技術を学んだ人間性豊かな技術者の育成をめざして、普通教科と専門教科の両方の学習をバランスよく行っている。本校の特徴として、1学年で6クラスを9クラス展開、27名の少人数授業を行い、基礎学力の向上と生徒指導の充実をすすめている。さらに3年次には、進学コースや専門2コースのコース制を設けて、生徒の進路希望や適性に応じている。

1. はじめに

近年少子化により生徒数が減少するとともに、学習意欲の乏しい、目的意識が希薄な生徒が入学してくる傾向で、1学年の早い時期に退学してしまう例が多く見られるようになった。中学校では、「中一ギャップ」といわれる不適応現象が指摘されており、移行期に直面した生徒に対して高校でもきめの細かい指導が求められる。

また、社会の急激な変化にともない、職業に関する価値観も多様化し、「フリーターの増加」「若年層の早期離・転職」「モラトリアムの長期化」などの諸問題が表面化してきた。さらに、将来への希望が持てず、少年犯罪の低年齢化・

凶悪化、短絡的犯罪の増加など青少年問題も深刻化している。それらの問題は、将来を見つめた進路決定や自己実現に向かった、日常の主體的な粘り強い努力を続けられないという目的意識の弱さによるところが大きいと思われる。このような時代であればこそ、「仕事を通じた自己実現の意味」や「職業観・勤労観」を身につけさせ、主體的に進路を選択、決定する能力・態度を育てる教育を発達段階に応じて実施する必要がある。そこで、キャリア教育の視点から進路指導の内容を点検し、改善・充実に向けて検討することとした。

2. 課題

本校では卒業生の約8割が就職をする。毎年十分な準備もできないまま、まわりに引っ張られる形で就職活動に入り、何が何だかわからないまま進路が決まったり、卒業にいたってしまう生徒が少なくない。また、一般的に就職ができた生徒もその半数が3年以内に転職するか会社を辞めてしまう現状がある。この課題を克服するため、進路指導に関する次の取り組みをした。

- (1) 3年間を見通した進路指導システムの構築
- (2) 自己理解 (3) 進路情報理解
- (4) 啓発的体験 (5) キャリアカウンセリング
- (6) 移行支援 (7) 追指導

以上のような取り組みを高校3年間の教育活動の中に計画・実施していく必要がある。本校の課題は、中途退学者数の減少、進路を選択・決定する能力や態度を身につけさせることである。よりよい活動(Do)が実践につながらなければ全く意味がないので、それについて以下に考えてみることにする。

3. 進路活動への計画的取り組み

- (1) 3年間を見通した進路指導システムの構築
進路に関する計画(ガイダンスや適性検査等)を年間行事に位置づけることで、生徒の発達段階や学校の状況に応じて計画的に進路指導を行

| | 1年 | 2年 | 3年 |
|-----|--------------------------------------|-----------------------------------|--|
| 目標 | 自己理解と目標設定 (進路適性の理解) | 進路選択に当たっての情報収集と分析 (進路情報の理解と活用) | 進路決定に基づく実務 (将来の生活設計) |
| 4月 | 進路希望調査 進路ガイダンス 二者面談週間 START | 進路希望調査 進路ガイダンス① 二者面談週間 | 進路希望調査 進路ガイダンス① 二者面談週間 職業適性検査 |
| 5月 | | | 進路保護者説明会 進路カルテ提出① |
| 6月 | 三者面談 職業レディネステスト | 三者面談 進路ガイダンス② | 三者面談 進路ガイダンス② |
| 7月 | 進路カルテ提出① | 進路カルテ提出① | 進路カルテ提出② |
| 8月 | | インターンシップ実施 | |
| 9月 | 施設見学 | 進路適正検査 Best Way | 進路ガイダンス③ 進路カルテ提出③ |
| 10月 | 進路講演会 | 工場見学 | |
| 11月 | インターンシップ報告会 | 進路説明会 | |
| 12月 | | | 進路決定者ガイダンス |
| 1月 | | | |
| 2月 | 職業理解(他く人体験談) クレペリン検査 | 職業適性検査(SPI) | |
| 3月 | 進路カルテ提出② | 進路カルテ提出② | |

表1 今後の進路指導年間計画の方向性

うことができる(表1)。進路希望の把握のためにも全学年で実施することが必要である。そして、そのよりよい実践のためには評価を年度末はもちろんのこと、行事直後に行うことを忘れてはならない。

次に、進路カルテ(表2)の作成がある。これは、生徒自らが希望調査や進路検査結果等を書き込むことを通して、目標を明確にし、さらに企業や学校を研究することで進路を考える機会とするものである。それを2年生、3年生と続けることで、自己の進路への意識や考え方の変化を見ることができる。さらに、カルテの裏に指導記録を書くことで、生徒と担任や進路指導部担当とコミュニケーションを図ることができる。このカルテを使用する事で、様々な調査をやりっぱなしにすることなく、1枚のシートに盛り込むことができるので、必要な情報を整理しやすくていい。生徒の進路情報を共有化できるので、二者面談や三者面談の際に適切な指導やアドバイスが行え、生徒の自己理解を促すことができる。生徒は教師との会話を欲しているので、時間の長短ではなく、面談の機会をつくり、話を聞くことが大切である。この面談により生徒の進路意識は高まり、教師にも「生徒の力になれた」との達成感が生まれると考える。

(2) 自己理解

生徒の自己理解や教員の生徒理解のために

表2 進路カルテ

も、客観的な参考資料として、心理テスト情報や能力テストの結果を活用する事は不可欠である。しかしその場合、目的にかなったよい検査を選ぶことが大切である。本校では過去クレペリン検査やレディネステストなどを行っていたが、最近では学年によってやっぱりやらなかったりするようになってきたため、昨年より学年に任せるのではなく、進路指導部で3年間を見通して適性検査をやることにした。

| 検査項目 | 1年生 | 2年生 | 3年生 | 合計 |
|----------|-----|-----|-----|----|
| 進路適性検査 | 3 | 0 | 0 | 3 |
| レディネステスト | 2 | 0 | 0 | 2 |
| クレペリン検査 | 0 | 3 | 4 | 7 |
| 職業適性検査 | 1 | 2 | 2 | 5 |
| SPI検査 | 0 | 4 | 2 | 6 |
| 実力テスト | 0 | 1 | 2 | 3 |

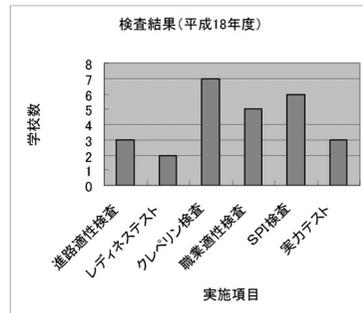


図1 埼玉県内工業高校適性検査取組結果(13校)

県内工業高校（調査結果13校）で行っている適性検査を調べた結果を図1に表す。

この結果より進路適性検査やレディネステストはほとんどやられず、クレペリン検査は従来通りやっている学校が多かった。最近の傾向として入社試験でSPI検査（適性検査）を多くの企業で筆記試験の一環として利用してきていることから、その対策としてSPI検査をやり始めたという学校が多くなってきた。

この結果を参考に、1年生に進路適性検査、2年生にSPI検査、3年生にSPI検査を計画した。今回2年、3年で続けてSPI検査を計画したのは、問題に慣れさせ、よい結果を期待したためである。

次に3年生の就職試験結果（表3）を調査した。受験会社の規模は、従業員500人以下の中小企業が約7割を占め、受験者の約半分が就職試験は面接だけであった。面接だけの会社が悪いということではないが、自分の興味や適性を見る前に試験のない会社を見ていないか心配である。この反省から次年度以降、次のような検査項目を計画した。

- ① START：新入生の個性や特徴から、悩み・ストレスまで「心の内」を多面的にわかる検査。
- ② 職業レディネステスト：「職業と自分」について考える材料を提供できる検査。
- ③ 内田クレペリン検査：処理能力・持続性・集中力を測定する検査。
- ④ Best Way 21：80職種別に色々な特性から分析。「自分の特徴をいかす仕事」を発見できる検査。
- ⑤ SPI（S-3）検査：実際に入社試験に幅広く利用され、能力・性格問題の両面から細かなデータをフィードバックできる。自分自身のウイークポイントがわかるだけでなく、自己PRや志望動機を考えるうえでも役立つ検査。
- ⑥ 職業適性検査：適性・能力を的確にとらえ現実的な適職検索ができる。

1 適正検査等

| | |
|-------|----|
| 適正検査 | 58 |
| クレペリン | 12 |
| 色識別検査 | 2 |
| 性格検査 | 2 |
| YG検査 | 1 |
| 体力測定 | 1 |
| SPI | 1 |

2 学力検査

| | |
|------|----|
| 一般常識 | 44 |
| 作文 | 32 |
| 数学 | 29 |
| 国語 | 26 |
| 英語 | 8 |
| 社会 | 8 |
| 理科 | 1 |
| その他 | 4 |
| なし | 27 |

表3 就職受験120社 適性検査・試験調査結果

⑦ 学力試験・模擬試験

進学者はもちろんのこと、常に自分の実力を把握しておくことは大切である。1つでも上を狙う意識を持たせる必要がある。

以上の検査を通して、自己理解や職業理解の充実を図っていきたいと考える。

(3) 進路情報理解

将来の職業や進路の情報を理解していくことは自己の進路意識を高め、進路設計を深めていくキャリア教育においてとても重要な過程である。

進路指導部のガイダンスをはじめ進路ワークブックを使った職業理解や、外部講師や高校内進路ガイダンスを企画する業者との連携を通して、より真実の情報を提供できるように計画する必要がある。

また最近、保護者が子どもの進路に無関心な例が多いように思われる。こうした状況を少しでも改善するためにも、保護者に進路情報を十分伝え、進路についての意識を喚起する必要がある。進路からの情報を学校の広報誌や進路ニュースの発行、進路説明会、進路研修会等で情報提供をしていくことが大切と考える。

(4) 啓発的体験

これは工業高校の腕の見せ所である。実習やインターンシップ、工場見学等様々な体験的学習を行うことができる。学科が中心で行う行事も多いだろうが、学校全体を見るスタンスを持つことで、進路やその他の分掌とも協力した行事設定や適切な時期の設定ができるのではないだろうか。

さらに工業高校ということもあり、資格・検定に興味を持っている生徒は多い。しかし、どんな資格があり、いつ受験できるかを知っている生徒は少ない。本校では、資格ガイドを作成しているが、今後ともその充実と学校をあげた指導体制の確立を図っていく必要がある。

(5) キャリアカウンセリング

進路相談で教師から肯定的な助言は大変うれしいものであるが、「早く進路を絞りなさい。」などは、生徒にとって大変なプレッシャーとなる。ひとつに絞るということは、他の可能性を失うというストレスを伴い、なかなか決断できないこともある。進路を考える上では、できるだけ多くのことに興味を持ち、多くの体験を通し可能性を広げる必要がある。そして、それぞれの希望の比較や希望についての情報収集などを十分に行いながら、自分の希望に優先順位をつけていくとよい。優先順位の高いものからチャレンジし、うまくいかなかったら次の希望へと移行していく意志決定と計画性が必要である。これからの進路指導は「絞る」指導ではなく、「広げる」指導を心がける必要があるのではないだろうか。

(6) 移行支援

一般的に、1学年の秋の段階で4割の高校生が、授業がわからないと言われている。1年生1学期の段階で、授業にうまくついていけるかどうかが高3年間を大きく左右する。そこで、簡単な授業評価を定期的に行い、理解度を確保する必要がある。さらに、平行して学習についてのカウンセリングを行い、生徒に授業に対するケアがあるという安心感を持たせ、学校に適應させていくことが必要である。ケアの存在は中学生が安心して高校を選ぶ条件になるだろう。

(7) 追指導

卒業生に対して私たちが行ってきた進路指導が本当によかったのかを評価する意味からも、今後、十分に検討に値するものである。その取

組例を示す。

- a 新たな進路に進んだ卒業生に対し、前の在籍校であった学校のキャリア教育が有効に作用し、新しい進路に適應しているかを調査し、必要に応じて卒業者に指導を行う。
- b 調査・指導に当たった内容をキャリア教育活動の評価に生かし、次年度の活動計画に反映させる。
- c 調査・指導に当たった内容を次年度以降の進路情報として使用する。
- d 手紙による追跡調査

追跡調査の卒業生コメントが掲載された「進路の手引き」などの資料には、生徒は食い入るように読み込むという。リアルな進路先の情報をいかに生徒が求めているかということかもしれない。

4. おわりに

進路意識というのは、3年間の様々な取り組みにより、少しずつ高まっていくものである。つまり、どうしてもコツコツ貯金をしていくしかない。ただ、そのために、まったく新しい指導計画を作ると、担任の教師への負担、学校全体への負荷が大きくなってしまう。今後既存の学習や行事を、どのように「キャリア教育化」させられるかがポイントだと思う。これまでの教育活動を捉え直し、取り組みの視点を変えることで、これまでになかった教育効果が期待できるであろう。できるところからはじめ、徐々に広げていくという姿勢が重要であり、その過程で、生徒や教師を変え、ついでには学校を変えていくことができるであろう。今回の研究を通して、学んだことや考えたことを先生方と共有して、実践していきたいと思う。

今回の執筆にあたり川口市立県陽高校嶋津昌吾先生や関口心理テストセンター武川幹生さんをはじめ、たくさんの方々から、色々な貴重なお話を聞かせて頂き本当にありがとうございました。